第五話

大殺陣、敵は一〇〇人

「菊乃さん……」

振り向いた母衣菊乃の面差しに、小夜の顔も強ばりました。

「……どうしたの？」

小夜にとって、初めて見る菊乃の顔でした。

顎を少しあげ、唇の端をゆがめ、やや細めた眼に浮かんでいたのは、たった一つの感情でした。

軽蔑。

「小夜さん……」

菊乃は、冷ややかな眼差しを、小夜と八重にかわるがわる向けながら問いました。

「なんなの、その恰好？」

「え？」

小夜は、しばらくぽかんとしていましたが、ふと振り向いて背後の八重を見やり、はっと気づきました。小夜と八重は、同じような夜鷹の恰好をしているのです。

小夜は説明しました。

「これは、ほら、前にお願いしたでしょう。辻斬りが横行しているから、用心棒を頼みたいって。幸い、引き受けてくれる人がいたのだけれど、その人が今夜は風邪で伏せっているから、わたくしが代わりに……」

「あきれた……」

菊乃は天を仰ぎ、怒気も露わに言いました。

「私、小夜さんが、あんな脚や肩を露わにした恰好で、歌って踊っても、仕方ないと思ってた。そうやって稼いで生計を立てているのだから、私の道場着と同じなんだって言い聞かせて。でも、その恰好はなに？」

「なにって、どういう事？」

菊乃になじられ硬直したままの小夜の背後から、八重が進み出て言い返しました。

「これは、あたいたち夜鷹の装束だよ。このなりで、男に身を売って、細々と食いつない

でいるのが夜鷹だよ。あんたの道場着とおんなじだよ！」
つかみかからんばかりの勢いで怒声を発する八重に、菊乃は俯(うつむ)きました。八重はなおも言い募(つの)ります。
「その夜鷹の恰好を、小夜さんがしたからって、それが、どうだって言うの？　武士にあるまじき事だって言いたいの？」
「違う！」
菊乃は顔をあげ、今にも泣き出しそうな顔で言いました。
「そういう事ではない！」
「じゃあ、なんだってのさ！」
「それは……」
「あたい、知ってるよ。要するに、あたいと小夜さんが同じ恰好をしているのが、嫌(いや)なんだろ？」
図星(ずぼし)のようでした。菊乃は顔を真っ赤にして「ちがうちがうちがう！」とわめき、
「なんで私が、夜鷹ふぜいに嫉妬しなきゃならん！」
そう叫んで菊乃は、はっとしました。
左手が、腰にさした刀の鞘(さや)を、右手は柄を握っている。今にも刀を抜いて斬りつける姿勢なのです。
……私は今、夜鷹を斬ろうとしている。
「やめて！」
小夜が駆け寄り、菊乃の両手首を掴(つか)み、刀を抜けないように押さえつけました。
「あなたの刀を、そんな事に使っちゃだめ！」
菊乃は、憑(つ)きものが落ちたように、両手を刀から離し、茫然(ぼうぜん)としています。小夜は続けました。
「お願い、嫉妬なんて、やめて。わたくしが好きなのは、あなたなのだから！」
そう言って小夜は、菊乃を抱きしめました。小夜に抱かれた菊乃は、一瞬、小夜を見つめ、その首に両腕を回してすがりつきました。瞬きもせず、苦しげな面差しを浮かべ、そのままへたりみました。合わせて小夜も、地面に膝をつきます。
二人は、抱き合った形で座り込んでしまったのです。
「ふうん、そっか！」
その小夜と菊乃に、八重の鋭い声が降ってきました。

「やっぱり、お侍はお侍だ。お侍同士、仲良くしてるがいいや」
と言い捨て、踵を返し、背中を向けて歩き去ろうとする八重に、小夜が慌てて言いました。
「待って、八重さん」
「うるせーよ！」
八重は一瞬、首だけ見返して叫びました。
「聞いただろ？　そいつ、あたいの事を夜鷹ふぜいって言ったんだ！」
八重は、握りしめた拳を振るわせながら言いました。
「夜鷹ふぜいで悪かったね！　夜鷹ふぜいがお侍の女を好きになって悪かったね！　しょせん、あたいは夜鷹さ！」
そのまま、ふたりに背を向けて、闇のなかに歩き去ったのです。
茫然と、八重の背中を見送っていた小夜、菊乃に向き直り、
「なんて事言うの！」
いきなり菊乃の頬に平手打ちを浴びせました。
「大嫌い！」
そして、八重の後を追って走り出しました。
菊乃は、打たれた頬に手を当て、うなだれたまま立ちつくしていましたが、やがて顔を覆ってしゃがみこみました。
「なぜ……あんなひどい事を……」
自分が恥ずかしい。
死んでしまいたい。
そんなことを呟きながら、よろよろと小夜が走り去ったのと反対方向に歩き出し、去っていきました。
「よく分からないが……」
やや離れた物陰で呟く声がしました。一部始終をのぞき見していた平井権八です。
「あの女ども、仲間割れしたか。今を逃す手はないぞ」
にやりと唇の端を歪めて笑い、走り去ったのでした。

同じ頃。
渋谷川にほど近い船宿、ここは町奉行の意を受けた平井権八や小幡兄弟が、芝新網町の

夜鷹粛清計画の根拠地として借り受けたところです。
その二階で、赤牛弥五衛門は小幡兄弟を相手に酒杯をかわしておりました。
「それにしても、ご母堂さまにはお気の毒でござった」
と小幡伝太夫が徳利の酒を弥五衛門の杯に注ぎつつ言いました。
「いえ……」
弥五衛門は酒杯を飲み干し、
「町奉行さまからも、ご香典をちょうだいし、立派な墓も建てていただきました。母は幸せだったと思います」
と頭を下げました。
弥五衛門の母、春枝は町奉行小幡越後守が長屋の陋屋を訪れた翌日、遺書をのこして自害して果てたのです。
遺書にはこうありました。町奉行さまから命ぜられた任務を立派に果たし、赤牛家の再興を果たすよう……と。
任務を引き受けるのを躊躇う弥五衛門を促す意味もあったのでしょう。
そして、弥五衛門は母の葬儀をすませた後、小幡兄弟に、任務を引き受けると答えたのです。
「そろそろ、平井が帰ってくる時刻だな」
小幡七郎右衛門は立ち上がり、部屋の隅に置いた町人風の着物に着替え、ほっかむりをしました。彼等は交替で町人に化け、夜鷹たちの様子を窺っていたのです。
その時、階下で足音が響きました。続いて階段をかけあがる音。
がらりと襖が開いて、平井権八が息せききって部屋に入ってきました。
「好機到来ですぞ！」
「好機？」
腰を浮かせた弥五衛門や小幡兄弟に、平井は答えました。
「そうです。急いで！」

しばらく後。
渋谷川の川面に、杙に繋いだ小舟が揺れておりました。
八重が、船底に寝そべり、月を眺めていたのです。
「なんで、あたい、あんな事言っちゃったんだろ」

とめどなく流れ落ちる涙が頬をつたって止まりません。
「そんなにあたい、夜鷹である自分を恥じてたのかなぁ……」
「おおい、八重さぁん！」
不意の大声に、身を起こした八重、川岸に目をやって、ほっとしたように笑いました。
「あら、弥生(やよい)ちゃんじゃない」
いつの間にか、夜鷹の恰好をした赤牛弥五衛門が立っていたのです。
「もう、風邪は大丈夫なの？」
「ああ、すっかりいいよ。ごめんね、心配かけて」
八重は舟を漕(こ)いで岸に寄せ、ひょいと川辺にあがり、弥五衛門に歩み寄りました。すると弥五衛門、
「なにか、あったの？」
と心配そうに、八重の顔を覗(のぞ)き込みました。眼が真っ赤に腫れて、頬に涙の乾いた痕(あと)があります。
「ああ、ちょっと、小夜ちゃんと喧嘩(けんか)しちゃってね」
八重は弥五衛門に背を向け、手ぬぐいで眼を拭(ふ)き、笑みを作って言いました。
「喧嘩？　どうして？」
そう問う弥五衛門の眼が光りました。
平井から聞いたとおり、やはり、小夜と八重は喧嘩別れしたのか……。
「なんでもないさ」
そう言って振り向いた瞬間、弥五衛門の身が動きました。
「うっ！」
八重が呻(うめ)きました。弥五衛門の握りしめた拳(こぶし)が、彼女のみぞおちに深々と突き刺さっています。
「やよい……あんた……」
八重は静かにくずおれました。
「もう、拙者は弥生じゃない」
弥五衛門は、八重を見下ろして呟(つぶや)きました。
「赤牛家の棟梁(とうりょう)、弥五衛門だ」
そして、夜明け。

赤坂村の外れ、蜂須賀の殿様の奥方に斡旋してもらった、生け垣に囲まれた一軒家では、荒牧小夜が、髪の毛を清国女性のように頭頂部で束ねて弁髪ふうに垂らし、胸に赤地のさらしを巻き、腰回りを赤い布で覆い、足に黒い皮靴を履いていました。

その日の昼下がり、青山の原っぱで公演を行う事になっていました。衣服を身につけるにはまだ早いのですが、胸に渦巻く悲しい思いを押し殺したい一心で、鏡にむかって化粧をはじめ、舞台衣装を身につけたのです。

……やっぱり、お侍はお侍だ。お侍同士、仲良くしてるがいいや。

……夜鷹ふぜいがお侍の女を好きになって悪かったね！　しょせんあたいは夜鷹さ！

そう言い捨てて去っていった八重を追い掛け、一度は追いつきましたが、いくら宥めても、「小夜さん、やっぱり、あいつの肩を持つんだ」と拒絶され、悄然としてわが家に帰り、眠れぬ夜を過ごしたまま夜が明けたのです。

鏡の前に、異国風の歌舞を舞い踊る舞台衣装姿の小夜が映っていました。

わたくし、お侍なんかじゃないわ。

武士だとか、夜鷹だとか、どうだっていいじゃないの……。

そう口のなかで呟いてみても、胸を圧迫するようなわだかまりは消えません。小夜は、壁にかけてあった、黒字に金色で大きな蝶々を刺繍した打ち掛けを羽織り、家の外に飛び出しました。

東の空が真っ赤に染まり、お日様が顔を出そうとしています。

小夜は大声で歌いました。

武士だろうと夜鷹だろうと、
好きになったら、おかしくなるのが恋
相手が夜鷹だろうと武士だろうと、
好きになったら突っ走るのが恋
恋をしよう
熱くなろう
振られたってもいいじゃない
命短し恋せよ乙女

「きゃーーーーー！！！」

「小夜さまーーー！！！」
原っぱの彼方から黄色い歓声が響きました。
見ると、女性が二人、やって来ます。小夜の舞台を欠かさず観に来ている、とある旗本のお姫様と、とある裕福な商人の娘です。
原っぱの草をかき分けて走り寄ってきた二人を、小夜は茫然と見つめました。この家、秘密にしていたのに、なんでばれたんだろ？
「やっぱり、ここであったか」
と旗本の姫君。
「ね、あたしの情報網、馬鹿にしたものじゃないでしょ？」
と商家の娘。姫君はぺこりと頭を下げ、
「すまぬ。小夜殿の公演で知り合ったこの娘から、小夜殿の住んでらっしゃるお家を突き止めたって聞かされて、どうせ嘘であろと思ったのだが、あまりにこの娘が言い張るものだから、つい売り言葉に買い言葉、一緒に行って確かめようという事になったのじゃ」
「嘘おっしゃい！」
商家の娘が抗議します。
「ぜひ、そこに連れていけとせがんだのは、あなたじゃありませんか。あたしのせいにするなんて、ひどいですよ！」
「ついてきたその方とて同罪ではないか。そんな事より……」
二人の女は、今度は声を合わせて、手にした風呂敷包みを差し出します。
「朝ご飯、作ってきました。召し上がれ」
小夜は、押しかけてきた御贔屓に引きつった愛想笑いを浮かべておりましたが、ふと、背後を振り返り、家の入り口の戸に、紙片が貼り付けられているのに気づきました。
剥がしてみると、紙片にはこう書き付けられていました。
昼八つ（午後二時）、小貝の森へ一人で来い。さもなくば、八重は牛裂きの刑に処す。
「どういうこと……？」
小貝の森は、目黒の外れにある森で、ここからは歩いて一刻（約二時間）ばかり。なぜ、そこに八重が？
牛裂きの刑とは、罪人の両手両足首を縛った縄を四頭の牛の尾に結びつけ、牛の尻を叩いて走らせ、生きながら罪人の身体を引き裂くという残虐きわまりない刑罰です。
なぜ八重が、そんな目に……？

そう思って小夜は、はっと気づきました。
江戸の各所で夜鷹たちが辻斬りにあっているなか、芝新網町(しばしんあみまち)だけが無事なのは、そこを仕切っている八重や、小夜や弥五衛門のような用心棒がいるからです。
かつての弥五衛門のように、正義を振りかざして夜鷹を斬りたがっている連中にとって、自分たちは目障(めざわ)りなのではないか。
だから、八重を人質に取り、自分たちをおびき出し、抹殺しようとしているのではないだろうか。
いずれにしても、相手は「一人で来い」と要求している。
行くしかない！
「こうしちゃいられない！」
小夜は、紙片を放り出し、家のなかに飛び込みました。二人の御贔屓(ファン)が呆気にとられて見つめるなか、再び家から飛び出した小夜は、唐人剣(とうじんけん)を二本、腰にぶち込み、駆け出しました。
「ど、どうしたんですか？」
「小夜さま、どこへ？」
呆気にとられた二人のファンに、小夜は言い捨てて走ります。
「小貝の森！」
「え、なぜ？」
「わたくしの、大事なひとが、殺されそうなの！」

走れ！
そう自分の脚に言い聞かせて、小夜は走りました。
絶対に八重さんを守らなければ！
行き交(か)う人々が、赤いさらしに黒い打ち掛(マント)け、美しい脚や腕を剥き出しに走る小夜に、眼を見張りましたが、小夜は意にも介しません。
とにかく、小貝の森へ！
「あれ、小夜さん！」
すれ違ったのは、夜鷹のお葉(よう)でした。小夜の家に届け物に来たようです。
「どうしたの、そんなに急いで？」
併走して走りつつ、お葉が問うと、小夜は答えました。

「小貝の森！」
「え？」
「八重さんが殺される！」
「ええー！！！」
「急ぐので、ごめん」
そこで小夜はお葉を引き離して走り去り、お葉は膝に手をついて息を整えておりましたが、
「大変だー！　みんなに知らせなきゃ！」
お葉は、ぜいぜい荒い息をこらえて、芝新網町の夜鷹長屋に向かって走り出しました。

しばらく後。
芝新網町の夜鷹長屋は大騒ぎになっていました。すでに夜も明け、日は高く昇っているのに、八重が帰ってこないからです。
「いなかったわ」
渋谷川に繋いである八重の小舟を確認しに行った夜鷹が帰ってきて言いました。
「どうしたんだろ」
「困ったなあ」
「心配よね」
「まさか辻斬りに……」
「不吉なこと、言わないで！」
夜鷹たちは口々に言い合っておりました。

その頃。
小貝の森は、広い野原をこんもりとした樹林が囲んでいて、外から人目につかない地形でした。
その広野に、百人余の旗本たちが、何かを囲むように輪になって並んでいます。
みな、同じような年格好の旗本の部屋住で、お金のかかったいい着物をまとい、たすきがけをして袖を縛りつけております。額に鉄を仕込んだ鉢巻きを巻いている者、鎖帷子で身を覆っている者、槍を構えている者、まるで戦でもするかのようなものものしい出で立ちなのです。

そして、輪の中心には、両手と両脚を縛った縄を、牛の尾につながれ形で仰向けに横たわっている八重の姿がありました。
観念したように、眼を閉じております。
「果たして、来るかな」
小幡兄弟がせかせか足を動かしながら、森の入り口のほうに目をやります。
「落ち着きなさい。あの女は必ず来ます」
平井権八は、静かに断言し、にやりと笑いました。
「来なければ、この夜鷹を八つ裂きにして、見物するだけの話です」
ふと、入り口の方から一人の武士が走ってきて、小幡兄弟に耳打ちしました。
「え？」
「兄上が？」
「お奉行どのが！」
思わず踵（かかと）を浮かして彼方を観ると、現れたのは、頭巾（ずきん）で顔を隠した小幡越後守。配下の同心を二人連れております。
土下座しようとする一同を、
「いや、今日は忍（しの）びじゃ」
と立たせてから、ふと、小幡兄弟の傍らに立つ赤牛弥五衛門に眼を止めました。
「なぜ、夜鷹がここにおる？」
確かに、赤牛弥五衛門、昨夜八重を誘拐した夜鷹の恰好のまま、白粉（おしろい）をさらに厚く塗り、唇に毒々しく紅をさした姿だったのです。ただ違うのは、腰に太刀をさしていることだけでした。
「いえ、この者は赤牛弥五衛門どの。昨夜の一番手柄です。夜鷹に扮してこの女に近づき、みごと誘拐に成功したのですから」
と小幡伝太夫が口を添えました。
「さようか。ご苦労であったな」
と苦い面差しに無理に笑みを浮かべた小幡越後守、牛に繋がれた八重に眼をやり、
「なかなか、近頃滅多に観られぬ面白い見せ物になりそうだな」
と言うと、小幡兄弟はじめ武士たちはどっとお追従（ついしょう）笑い。
八重、ちらりと町奉行に眼をやり、
「たかが夜鷹一人に、侍が百人がかり。しかもお奉行様までおいでだよ」

と呟き、再び瞼を閉じました。
「いずれ野垂れ死ぬのが運命の夜鷹の末路としちゃ、なかなか賑やかなもんだ。感謝しなくちゃね」

その頃。
小貝の森の入り口では、三人の武士が、こちらに伸びてくる一本道を塞ぐように立っておりました。余計な邪魔の入らぬよう、他の者の出入りを阻む役目です。
「あれは……」
一人の武士が、一本道の向こうから走ってくる人影に目をとめました。黒地に刺繍の入った打ち掛けを翻し、身には赤いさらしを巻いただけの異装。
言うまでもなく、荒牧小夜。
「待て！　誰だ？」
「荒牧小夜」
立ち止まった小夜がそう告げると
「なに、荒牧？」
「あの女か！」
三人の武士は、腰の太刀に手を掛けて身構えます。小夜は三人を見回し、
「お前たち、八重さんをさらった一身か？」
「いや、拙者らは見張りを頼まれただけだ」
一人の武士がそう言って首を振ります。
「荒牧小夜、おぬしは通すように言われている。さ、行け」
そう言って三人が道を空けたので、小夜、再び走ろうとした時。
三人は抜刀し、背後から襲いかかりました。
「その手は食わぬ！」
さっと踵を返した小夜、振り向きざまに中央の武士の股間を蹴り上げ、腰にさした二本の唐人剣を左右の手で抜き放ち、翼を拡げるように振るうと、左右の武士たちは喉首を切り裂かれ、血を噴きながら倒れました。
蹴られた睾丸の激痛に太刀を取り落とし、しゃがみ込んだ武士の胸ぐらを右手で掴んだ小夜、無理矢理立たせると、傍らの杉の梢に押しつけ、左手を股間に差し込み、睾丸を鷲づかみ。

苦痛に呻く武士に、小夜は問います。
「なんのために、八重をさらったの！」
「せ、成敗するためだ……」
滝のように涙を流し、全身を痙攣させながら、苦しい息の下から武士は答えました。
「成敗？」
「芝新網町の夜鷹を一掃し、江戸の街をきれいにするために、お前が邪魔だったんだ。だから、町奉行の仰せで……」
「町奉行が？」
小夜は、森の方をにらみ据え、さらに問いました。
「そうか……町奉行自ら、夜鷹一人を牛裂きの刑か」
そのまま、武士の睾丸を握り潰し、森にむかって駆け始めたのです。

その頃。
芝新網町の夜鷹長屋へと向かう道を、母衣菊乃は、例によって大声で独り言を呟きながら、せかせかと歩いていました。
その姿に、道行く人々は眼を見張りました。
菊乃は、まるで仇討ちか切腹でもするような、白い着物に白い袴（はかま）、白足袋（たび）と白ずくめだったのです。
「こうなったら死ぬしかない、こうなったら死ぬしかない」
「あんな言葉を発してしまって、私はもう生きる価値もない」
「死んでお詫（わ）びする、死んでお詫びする」
「みごと腹切ってお詫びする」
これからやろうとしている事を、全部言葉で説明しつつ夜鷹長屋へと急ぐ菊乃でした。

同じ頃。
小貝の森では、荒牧小夜が茫然と立って、眼を左右に動かしておりました。
「あら、まあ……」
小夜の眼の前には、百人の武装した武士たちの姿がありました。
「女一人に、これだけの……。あきれた」
しかし、十重二十重（とえはたえ）の人垣の向こうに、八重が捕らわれているのだと思うと、改めて気

を引き締めつつ、小夜は叫びました。
「わたくしが荒牧小夜。八重さんはどこ？」
おおお！！！
あいつか！！！
男のきんたまを潰す卑怯者めが！！！！
刀の錆(さび)にしてくれる！！！！！
地響きのような歓声が湧き起こりました。百人の武士たちが、咆吼(ほうこう)しながら羽織を脱ぎ捨て、抜剣したのです。
武士たちは、切っ先を小夜に擬(ぎ)しながら、じりじりと間合いを詰めてきます。
「ばかー！　来るなー！」
武士たちの背後から、女の甲高(かんだか)い叫びが聞こえてきました。
言うまでもなく、八重です。
「なんで来るのよー！　なんであたいみたいな夜鷹ふぜいを助けに来たんだよー！」
八重さん……。
小夜の胸が詰まりました。八重の叫び声が続きました。
「あたい、もういいんだ。小夜さんにあんな事言っちゃったけど、あたい嬉しかった。小夜さんみたいな素敵なひとに、人間扱いしてくれただけでも、もう十分なんだ。だから、早く逃げて！」
「そうはいかないわ！」
小夜は、左右の手に唐人剣を構え、叫び返しました。
「八重さん一人の命のためなら、出来損ないの侍(さむらい)ふぜいの百や二百、斬り捨てたって当然よ。だから待っていて！」
言うなり、小夜の体が跳躍しました。
着地したとたん、二人の武士が血を噴いて倒れ、一人の武士が、蹴り上げられた股間を両手で抑え、地面を転がって悶絶します。
背後に回った武士が、斬りかかってきました。小夜は振り向きざまに剣を一閃させ、的の両眼を斬り裂きました。
「ぎゃあああーーー！！！！」
血を噴く顔を両手で押さえて苦悶する武士を尻目に、再び振り向いた小夜、突き出された槍を小脇で受け止め、敵の足を払って仰向けに倒し、その睾丸を思い切り踏みつけまし

た。
「あ……あうう……」
槍を持った敵は甲高く呻き、白眼を剥いて激しく痙攣します。小夜の踵の下で破裂した睾丸から噴出した血が迸り、袴の股間を赤く染めました。
あっという間に、屍になった三人と、去勢され悶絶する二人を見やり、武士たちは一瞬怯みを見せます。
小夜は、雲霞のような武士の人垣を見回して、叫びました。
「今までは、きんたま潰すだけで勘弁してあげたけど、さすがに百人が相手では、そんな余裕はないわ。さっさと八重さんを解放しないと、お前たち、容赦なく皆殺しにするわよ。覚悟なさい！」
「気後れするな！」
背後で、小幡伝太夫が叫びます。
「たかが女一人だ。一斉に斬りかかって仕留めてしまえ！」
気を取り直した九十余の剣先を見やり、小夜は呟きました。
「正直、百人は多すぎるかも……」
一人で百人を相手して戦うなど、台湾でも経験したことはなかったのです。

その頃。
芝新網町の夜鷹長屋は、てんやわんやの大騒ぎでした。お葉が戻ってきて、小夜が八重を助けるため、小貝の森にむかったと仲間に告げたのです。
「そういえば……」
一人の夜鷹が思い出したように言いました。
「昨夜の客が言ってた。小貝の森におさむらいが百人も集まって、何かやってるって」
「ひゃ、百人！」
「確か小夜さん、前に十五人のさむらいのきんたまを潰したことがあったね」
お葉は唇を噛みしめました。
「たぶん、その仕返しだよ……」
「でも、いくらなんでも、一人で百人を相手だなんて！」
「どうしよう、八重さん、殺されちゃうよ！」
夜鷹たちが口々にわめいているところへ、

「小夜さん、八重さん、いるかー！」
と叫んで木戸口を蹴破(けやぶ)らんばかりの勢いで駆けこんできたのは、母衣菊乃でした。八重の住む部屋の障子戸をばんばん叩きながら叫びます。
「見てくれ！　私は腹を斬る。私は、夜鷹をさげすんでいた気持がどこかにあったのだ。自分自身が恥ずかしい。もう生きてはいられない。潔く腹を斬るから、介錯を頼む！」
「馬鹿言ってんじゃないよ！」
お葉が走り寄り、平手打ちを浴びせました。
茫然とする菊乃に、お葉は言いました。
「小夜さんはね、いま、八重さんを助けるために、百人の武士と戦ってるんだよ！」
「なにー、百人！」
菊乃は立ち上がりました。
「それはいかん、助太刀せねば！」
と駆け出したのです。お葉は慌てて、
「ちょっと、どこに行くのさ！」
「そうだ、場所はどこ？」
「小貝の森よ！」
「よっしゃ！　小夜さん、八重さん、死ぬな！　今行くから、待っててー！」（つづく）